

# 『テス』における記憶とアイデンティティ ——記憶の場としてのストーンヘンジ<sup>1</sup>——

金子幸男

## 序

ハーディの全小説は、パストラルから悲劇への流れであるところ大雑把に言ってみることができる。およそ二十五年にわたる小説執筆期のうち、前半期の小説では、しっかりとした村落共同体が頑と控えており、中心には結婚の祝宴を張るための巨大な樫の木が一本あったり (*Under the Greenwood Tree*)、何百年と変わらず羊の毛刈りが行われている納屋があったり (*Far from the Madding Crowd*)、村人をダンスにいざなうメイ・ポールがあったりする (*The Return of the Native*)。その中心のまわりに自然のリズムと調和した田舎の生活が営まれるのだ。しかし、後半期の小説になると、カウンティ・タウンが舞台となって、二人の年齢の違うよそ者同士が商売を通じて覇権を争ったり (*The Mayor of Casterbridge*)、自然の申し子とも言うべき森の若者は生命力を失って死に、その青年の好きだった土地の娘は、よそから来た家柄のいい夫とともに森を出てゆく (*The Woodlanders*)。さらには村の共有地でダンスに打ち興じていた若い女性たちが、農村の疲弊により生活が苦しくなり、農場から農場へと職を求めて移動するようになったり (*Tess of the D'Urbervilles*)<sup>2</sup>、はたまた鉄道が進出して歩く以外の手段が使える時代になり、若者は町へ出て自分の野心を達成しようと階級移動を望むようになったり (*Jude the Obscure*)。つまるところ、人間はだんだんと根無し草になって、村落共同体は解体する方向へと向かう。ここに人間は場所の感覚を失い、悲劇が生じる可能性が高くなる。

『テス』のダーヴィーフィールド家は、マーロットという村の行商人・農民

というアイデンティティに満足できず、由緒あるダーバーヴィル家の末裔であると聞かされて有頂天になり、そこに階級移動への可能性を見る。これが悲劇的過失である。以後、ヒロインのテスは地方の人々がダーバーヴィルについて持っている記憶の糸にたぐり寄せられるように、ダーバーヴィル家にゆかりのある土地か、その近くに行き滞在することが多くなる。不幸が起こるたびに場所が変わるので、テスは移動が激しくなるのだ。その陰にはダーバーヴィルの家系が隠然と控えている。場所が変わるということは、ある意味でアイデンティティが変化するということでもある。最初はダンスに興じるマーロット村の娘、次には偽ダーバーヴィル家のお屋敷の召使い兼アレックの情婦、マーロット村の未婚の母、トールボセイズ農場の乳絞り娘、同居は一日だけでその後は別居するエンジェルの妻、フロントコーム・アッシュその他での農場労働者、サンドボーンの青鷺荘ではアレックの情婦、そしてアレックの殺人者、夫エンジェルに伴われて逃避行をする妻、逮捕・処刑される殺人者とくるくるとめまぐるしくそのアイデンティティが変化する。しかもアイデンティティは記憶と密接な関係がある (『記憶のかたち』 7)。その記憶は何によって媒介されるか。記憶を伝える媒体として、Burkeは、(1) 口承伝統 (2) 文書 (3) イメージ (絵・写真、メモリアル〈墓石・銅像・メダル・土産品・モニュメント〉) (4) 行動 (職人の技を伝達する場合と儀式的行動・顕彰・記念行動) (5) 空間 (記憶の宮殿や記憶の劇場、特定の空間配置が特定の記憶を誘発しやすくする場合) をあげている<sup>3</sup>。我々にとって記憶と言え、まず文書を思い浮かべるだろう。アレックの父は、北部で成功した新興商人というアイデンティティを捨てるために、記憶が詰まっている大英博物館で家系図を調べた結果、偽ダーバーヴィルを名乗ろうとした。また、口承の記憶を最大限に利用したのは、テスの一家がダーバーヴィルの家系の知識を仕入れたときのことである。ダーバーヴィルの家系はテスがつぎつぎとアイデンティティを変える間、黒幕のように控えていて、時折不吉な顔を出す<sup>4</sup>。ダーバーヴィル家の馬車の伝説のように口承で伝えられていたものが時折顔を出す<sup>5</sup>。(3) のイメージの例としてはテスの父親の墓石にもダーバーヴィル家の末裔であることが刻まれていたことがあげられよう。家系というのはアイデンティティの根幹に関わってくる部分だ

からである。ちなみにテスの子供のソローの粗末な墓も、(3)の例である。

記憶という点で考えると、家系という文字テキストになっているもの以外に、文化遺産も記憶の媒体となりうる<sup>6</sup>。パークの分類で言えば、(3)のイメージに当たる。よってストーンヘンジという先史時代の遺跡も、テスの記憶もしくはアイデンティティと関連させて論ずることが可能であろう。ストーンヘンジは、『テス』という作品の終わり近くに登場して、存在感があるにも関わらず、これまで十分な批評的関心が払われてきたとは言えない。せいぜい、非現実的な雰囲気や漂わせる世界、異教徒の太陽崇拝の神殿ということで軽く触れてもらえればいい方であった (Bonica 851; Gose, Jr. 227; Howe 127; Johnson 99; Vigar 187)。そこで、本稿では、ストーンヘンジに焦点をしばり、記憶とアイデンティティという観点から分析してみたいと思う。

さしあたって、記憶を定義しておきたい。『記憶のかたち』という本の定義が一番妥当と思われる。その本の定義によれば、記憶とは、「過去を認識しようとするあらゆる営み、そしてこの営みの結果得られた過去の認識のあり方」であり、「ほとんどあらゆる人々が過去に関して抱く知や思いのアンサンブル」(『記憶のかたち』7)である。また、「こうした記憶の営みはいずれも表象行為である。すなわち、数知れぬ過去の出来事の中から、現在の想像力に基づいて特定の出来事を選択し呼び起こす行為、表象を媒介とした再構成の行為である。」(7)とある。この論考では、記憶という場合にテスの記憶だけを問題にするのではなく、当時存在したと想定されうる、記憶を担ういくつかのグループもみてゆくことにする。アイデンティティについてはテスのみを問題にすることになるであろう。以下、この先史時代の遺跡に関わるさまざまなコンテクストを考察した後、随時ストーンヘンジの場面の具体的な分析を織り込んでゆきたい。

## 1

### ストーンヘンジ：歴史・ハーディと考古学・発掘

ストーンヘンジは、古代の遺跡である。まずは、ストーンヘンジの歴史について大事なところだけを眺めてみよう。『ペニーマガジン』(1834年2月22日

号)の匿名の記述者によれば、'Stonehenge'という名前は、サクソン語で、'Hanging Stones'を意味するが、決してサクソン族が建てたものではなく、彼らが訪れるずっと以前のものだと言う。Inigo Jones はストーンヘンジは古代ローマ人の寺院で、天空神ウーラノスにささげたものであるという説を唱えていたが、この匿名の筆者はそれはばかげた説であり、自然が作ったと言った方がまだましだと言う。昔からの言い伝えとして残っていたものを、年代記作者たちが記録しているところでは、魔法使いマーリンによって、巨石は、アイルランドのキルデア州のカラッハ平原から運ばれたものであるとのことである。またデーン人に帰する者もいる。しかし、William Stukeley の1740年の調査とそれに基づいた本が出版されて以来、'it is a Druidical temple of the ancient Britons.' というのが定説となっており、宗教的礼拝のみならず、天体観測にも使われていたという。『ペニーマガジン』の記述者が指摘するところでは、19世紀の人々はストーンヘンジをドルイド僧の寺院と考えていたのであるが、19世紀の人々がそのように考えていたことについては後世の歴史家も修正はしていないようである (Souden 24; Chippindale 第5章)。これにChippindaleの考えを補っておくと、彼は、ドルイド説をはじめて唱えた人間として、ステュークリーよりも少し前の、John Aubry をあげている。オーブリーは、伝記作者として有名で、ロイヤル・ソサイエティのメンバーにして、骨董収集家、民話や地名研究のパイオニアでもある(第4章)<sup>7</sup>。また、現在では、ケルト人ドルイド説は誤りとなっている。ストーンヘンジは、I期、II期、III A期、III B期、III C期、IV期にわたって、およそ二千年あまりかけて建てられたもので、一番古いものでも、紀元前三千年よりも数百年は前のものであり、第IV期でも紀元前1000年頃までなので、ケルト人がブリテン島にやってきて栄えた頃よりもおよそ500年は前のことである。ちなみに巨石群は第III期に属する (Atkinson; Anderson)。

ハーディは考古学に大変な関心を寄せていた<sup>8</sup>。ハーディは『テス』に限らず、いろいろな作品で、遺跡等の考古学的発掘物を用いている。一番有名なのが、『カスターブリッジの市長』の中に出てくる、ローマ時代の遺跡、モームベリー・リングという名の円形闘技場跡であろう。ヘンチャードが、別れた妻

のシーズンと久しぶりに会う際の場所がこのリングであった。ハーディ自身がこのリングの発掘に関して、『タイムズ』紙に投稿しているほどの熱心さだ(Ingham 7-8)<sup>9</sup>。また、『帰郷』の中でも、エグドン・ヒースで発掘された古代人の遺骨入りの壺が話題になる。クリムはこれを、母ヨーブライト夫人にやるはずだったのだが、恋人のユーステイシアにやってしまったことで、女性二人の不仲を増幅してしまうというエピソードが出てくる。第二詩集『過去と現在の詩』の中に、「名所巡歴の歌」と題された一群の詩があるが、これはハーディ夫妻がイタリア旅行をしたときの経験を詠ったものである。その中の「フィエゾレの古代劇場にて」という詩は、ある少女からローマ皇帝の姿が刻まれたコインをもらうのだが、そのコインが我が家でも掘れば見つかるはずのコインと同じであることからくる深い感慨の念を詠っている。

ハーディの歴史的に由緒ある建物の知識が増えたのが、ドーチェスター時代に建築家ジョン・ヒックスの弟子として活躍し、またロンドンでアーサー・ブルムフィールドの弟子になっていたときとすれば、彼の好古趣味、古代ローマ時代の遺跡や先史時代の遺跡に対する深い関心は、地の利を生かして独学で培われたものようである(Ingham 6)。ハーディの好事家らしいところは、1884年、ドーセット博物・好古野外クラブの会合で、自宅のあるマックス・ゲートで発掘された三体のローマ人の遺骸について講演したにも現れている(Ingham 7; Orel 191-195)。

なぜ、このようにハーディは地下を掘って出てくるものに関心を示したのか。なぜストーンヘンジを用いたのだろうか。この点を考えるのに、一般に発掘とは人間にとって何を意味する行為なのかを考えてみよう。

結論から言えば、発掘とは、人間のアイデンティティと関係のある行為である。よく知られているように、フロイトは、人間のアイデンティティを意識の世界というよりも、無意識に蓄えられた記憶の中に求めようとした。その無意識の記憶はパリンプセストになっており、それを説明する喩えとして彼が『文明とその不満』の中で持ち出したのが、古代ローマ遺跡である。長期間にわたって時代により異なる建物が同じ場所を占めることになったこのローマの遺跡群を、彼は重ね書きのイメージで捉えようとする(コロセウムを目の前にしながら

ら、そこにかつてあった皇帝ネロの黄金宮殿を見、ハドリアヌス帝が再建したパンテオンを、同じ場所にもともとあったアグリッパ創建のパンテオンと重ね合わせて見る)(フロイト 724)。フロイトにとって無意識の記憶は、建物の記憶と同じように完全になくなることはない。またケイト・フリントは、都市の街路の下にあるものを発掘することは、埋もれた過去とのつながり、個人および共同体の記憶との連続性を確認することであるという(ケイト・フリント 141)。また彼女は都会の変化が激しい時代には、歴史を目に見えるようにすることは、人心を安定させる働きがあるとも言う(ケイト・フリント 165)。つまり、過去の痕跡である発掘された物は、記憶として個人や共同体のアイデンティティ形成に一役買う働きがあるのである。また、ロザリンド・ウィリアムズは、発掘は、真理の発掘のメタファーとして18世紀から19世紀にかけて用いられるようになったと言っている(ウィリアムズ 第二章)。

このような含蓄を持つ「発掘の空気」を呼吸していたハーディは、農村共同体の崩壊を目の当たりにする中、考古学的発掘を示唆する場所やモノを描くことを通して、自己のアイデンティティの発掘、過去の記憶との連続性の確認という、一種の真理探究を試みたという言い方ができないだろうか。そこにハーディがストーンヘンジを作品で利用した動機が垣間見られるような気がする。

## 2

### 神話的・宗教的な記憶の場としてのストーンヘンジ

それでは、ストーンヘンジという遺跡は、記憶という観点からみた場合、どのような集合的記憶をたぐり寄せるのであろうか。ハーディはどのような集合的記憶に依拠して、テスをどのように位置づけようというのであろうか。テスにはそのような活性化された記憶についての自意識があるのであろうか？テスはどのような記憶に根ざしたアイデンティティを得るのであろうか。

集合的記憶の場として考えてみた場合、このような先史時代の遺跡というものは、「純粋な形態であって、なかには何もない。そして、概念であれ、情動であれ、象徴であれ、人がそこに込めようとするものすべてを受け入れようとする。(中略)そこでは、個人も個々の社会集団も、自分自身を見いだすから

である」(ドゥムール 300)と語っているのは、ラスコーの洞窟を記憶の場として論じた先史考古学者のドゥムールである。言い換えれば、見るものの思いをかなり自由にそこに投影することができるということであるから、さまざまなアイデンティティを持った人間が好きなように自分の属する集団の記憶をストーンヘンジに投影もしくは刻み込むことができることになる。極論すれば、マールロット村の祭りをストーンヘンジで行うようにすれば、村の「公共の記憶」を担わせることもできるはずなのである。もちろんこんな途方もないことは実際のテキストの中では出てこないのであるが。では、どのような集合的記憶を活性化させることができるのであろうか。選択肢は限られていて、以下では、異教的な記憶、キリスト教的な記憶、ナショナルな記憶を順にみてゆくことにしたい。

この遺跡を、当時の人々の大半というよりも、ハーディを含む一部の影響力のある知識人や文化人、芸術家が共有していた当時の支配的な神話観という形を取った集合的記憶という観点から考えたとき、テスのアイデンティティはどのようなものであろうか。このような集合的記憶を共有するグループをここでは、「記憶の共同体」と呼ぶことにしよう<sup>10</sup>。ハーディも、この共同体の一員として、神話の記憶を利用してこの場面を描いているのだという批評家がいる。J.B.Bullen は、*The Expressive Eye*<sup>11</sup> と、*The Sun Is God*<sup>12</sup> という二著作の中の関係する箇所、19世紀の神話学者の見解、特にマックス・ミュラーが唱えた太陽神中心の神話に言及し、その洞察を、"all myth and legend, indeed the primary religious impulse in man, could be traced back to the response of the primitive mind to the rising and setting of the sun." (*The Expressive Eye* 209), "the sun acted as the most important influence on the human imagination" (*The Expressive Eye* 210) であると表現し、この太陽を中心に据えた神話観が、文学者や芸術家におよぼした多大な影響を指摘する。ラスキンの物理的光と精神的な光の両方を見ようとする太陽神話観、ペイターの愛と破壊という二面性を持ったアポロ神、その二面性をキリスト教にまで拡大したハーディ自身の慈愛と懲罰のキリスト教観を用いて、ブリンはこの作品

のトルボセイズ農場の場面や、ストーンヘンジ等の場面を解釈する。特にここでは、二面性を持ったアポロ神という見方と、二面性を持ったキリスト教という考え方をストーンヘンジに適用する。

よく知られていることだが、ストーンヘンジでは、太陽が非常に重要な役割を果たす。以下に太陽の場面を見てみよう。

In the far north-east sky he [Angel] could see between the pillars a level streak of light. The uniform concavity of black cloud was lifting bodily like the lid of a pot, letting in at the earth's edge the coming day, against which the towering monoliths and trilithons began to be blackly defined.

'Did they sacrifice to God here?' asked she [Tess].

'No,' said he.

'Who to?'

'I believe to the sun. That lofty stone set away by itself is in the direction of the sun, which will presently rise behind it.' (370; 下線は筆者)

非常に印象的な日の出直前の場面であるが、太陽はヒールストーンと呼ばれる石 (that lofty stone) の背後からのぼってくるのであり、太陽は太陽神として捉えられていることが分かる。しかも、この太陽神が上ってくる場所では、その前夜には、'He listened. The wind playing upon the edifice, produced a booming tune, like the note of some gigantic one-stringed harp...'(368)なのであり、ハーブへの言及から、この太陽神がアポロ神をさしていることがわかる。しかし、この場面では、アポロ神はトルボセイズ農場における愛と再生の神、生命を育むエネルギーを与えてくれる神ではなく、破壊の神である。太陽があがった直後に、テスは取り巻く官憲の手によってつかまるからである。アポロ神に二面性あるといったが、そのうちのマイナスの面がここでは強調されているのである。また、太陽の光から、キリスト教的解釈を試みる場合でも、

やはりトールボセイズ農場の慈愛にみちた復活の光ではなく、破壊と懲罰の光である<sup>13</sup>。

以上がブリンの解釈である。端的に言えば、神話的知識を持った「記憶の共同体」<sup>14</sup>に入ると（ハーディもその一員であることは見てきたが）、テスのアイデンティティが異教徒であるにせよ、キリスト教徒であるにせよ、彼女は太陽の破壊的な力によって破滅させられたという理解をすることになるのだ<sup>15</sup>。

だがテスはそれほどはっきりとこの遺跡のある場所で、自分を異教徒として自己規定しているのだろうか。また、キリスト教徒と言えるだろうか。

たしかに、"And you [Angel] used to say at Talbothays that I was a heathen. So now I am at home." (369) と言っているのだから、異教徒としての自己認識は持っているように見えるが、あくまでも、かつてエンジェルがそう言っていたから、それに従えば自分は異教徒ということになる、と消極的な自己規定なのである。しかもこのストーンヘンジの場面で、この異教徒の寺院についての知識を与えてくれているのはエンジェルの方だ。テスにはあまりこのストーンヘンジの知識がないようだ。さらにトールボセイズ農場において、テスはエンジェルに自分のことをアルテミスやデメテルと呼ばれると、何のこともかさっぱりと分からないから、テスと呼んでくれと、異教徒の女神のアイデンティティを拒絶し、個としてのテスというアイデンティティを主張していた。エンジェルは神話の知識を流通させ、かつ保持して後世に伝えてゆく「記憶の共同体」の一員ではあっても、テスはそうではないのである。端的に言えば、彼女の異教徒としてのアイデンティティはあいまいなままなのである。

また、テスは、キリスト教徒というアイデンティティを持って死ぬのかということについては、ストーンヘンジという舞台を、わざわざ 'heathen temple' (369) と言っているのだから、これも少し無理があるだろう。作品全体を見回してみても、偶然も手伝ったとはいえ自分の子供に対する洗礼を牧師に拒絶されて自分で施さなくてはならなくなり、亡くなった我が子の正当な埋葬も拒絶されたテスの姿がある。また「姦淫するなかれ」の聖句を、放浪しながら至る所を書いていくグロテスクで狂信的な男の姿がある。これらは、キリスト教徒

がヒロインにふさわしいアイデンティティではないことを告げている。

このストーンヘンジという場面では、テスはそのどちらによっても掬い取することはできないのではないか。テスにとって異教徒としての集合的記憶も、キリスト教徒としての集合的記憶もこの場所に刻印されてはいない。前者はエンジェルの属する知識人階級が共有する記憶であるし、後者は、異教徒の寺院であると言われているだけに、無理がある。この巨石群とそのまわりの環境がキリスト教の記憶を引き出すことはないのだ。それではテスが、ストーンヘンジを記憶の場として捉えられるような何か別の選択肢、別の集合的記憶の可能性はないのだろうか。また、そのようなものがあるとして、テスはそれを自己のアイデンティティの少なくとも一部としているのだろうか。

### 3

#### ネイションという「記憶の共同体」とストーンヘンジ

ここで、神話の知識を共有する「記憶の共同体」から離れて、もっと大きな「記憶の共同体」に目を向けてみよう。それはネイションという「記憶の共同体」である。19世紀末のネイションの重要性は、次の一節からもうかがわれる。

十九世紀末の連合王国では、国民統合をすすめるアイデンティティの形成を目指す動きが強まった。その背景には、自立を志向する非イングランド系民族の動向や、ナショナリズムが高揚しつつあるヨーロッパ諸国に対するエリート層の危機感があった。アイルランドは自治を要求し、スコットランドやウェールズも、自立性を求める傾向が強くなった。またエリート層は、イギリスは、ヨーロッパ諸国に比べ、国民統合がはるかに遅れているのではないかという危機感を抱くようになったのである<sup>16</sup>。(水野 186)

また、ピーター・バークは、ヨーロッパ大陸をも射程に入れて、次のように言っている。

It [the later nineteenth century] was certainly an age of a search for national traditions, in which national monuments were constructed and national rituals (like Bastille Day) devised, while national history was given a more important place in European schools than ever before or since. The aim of all this was essentially to justify or 'legitimate' the existence of the nation-state; whether in the case of new nations like Italy and Germany, or of older ones like France, in which national loyalty still had to be created, and peasants turned into Frenchmen. (Burke 55; 下線は筆者)

ここで言及されている、'national traditions' (国家的・国民的伝統) や、その一部を構成する 'national monuments' (国家的・国民的記念碑) や 'national rituals' (国家的・国民的儀式)、また 'national history' (国民の歴史) は、集団的アイデンティティの強化と結びついている。このような集団的アイデンティティの強化は、さらに「公共の記憶」と結びついている。エルネスト・ルナンは有名な「ネーションとは何か」という講演の中で、「ネーション」の根拠として種族、言語、宗教、利害、地理を持ち出すことを否定し、「記憶の共有」と「現在の同意」(両者は一体のものと把握される)によってネーションを裏づけている<sup>17</sup>。過去の記憶が共有されることこそがネーションのアイデンティティには不可欠なのである(『記憶のかたち』10)。このように記憶と結びつけて捉えたネーションのアイデンティティの強化は、Hobsbawmの言葉を借りれば、'invention of tradition'のために何を行うかということに尽きるであろう。ホブズボームの挙げている代表的な三つのシンボルは国旗、国歌、国家的・国民的な表象であるが、最後の例の具体的なものとしては、国家を擬人化したイメージであるジョン・ブルや、細身のヤンキーのアンクル・トムのイメージ(アメリカの場合)をあげている(*Invention of Tradition* 11)。これに、『パンチ』誌によく登場し、大英帝国を象徴する、アテネ女神をモデルにした女神ブリタニアのイメージを付け加えてもいいであろう。アイデンティティ強化としては、記念・顕彰行為(コメモレイション)として、世紀

末、ロンドンで銅像建築ブームが起こったことをさらにあげてもよい。「ヴィクトリア時代中期を過ぎると、イギリスでは、いわゆる偉人 great men のコメモレイションが顕著な広がりを見せるようになり(中略)ごくかぎられた国王や軍人だけではなく、科学、文芸、美術、産業などをふくむ、さまざまな分野で活躍した各時代の多数の死者たちの生涯と業績を記念し、顕彰する行為が急速に広がってゆく」(光永 84)。これにレズリー・スティーヴンの編纂した『国民伝記事典』(1882刊行開始)や、ナショナル・ポートレイト・ギャラリーの開館(1896)を加えることもできるであろう。

では全国レベルではどうかと言えば、歴史的建造物と景勝地を国民の遺産として保護することを目的として設立されたナショナル・トラスト(1895)をあげることができよう(水野)<sup>18</sup>。創設者の一人であり、「湖水地方の番犬」と言われていた牧師のハードウィック・ローンズリィは、1894年に行われた発会式で、「人々は自然のままの絵という偉大なナショナル・ギャラリーを本当に作りあげつつある(喝采)」(四元 35-36)と演説している。

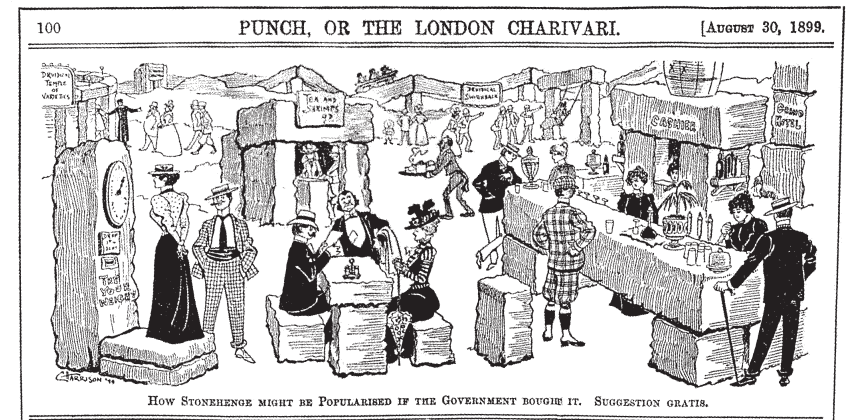
ナショナル・トラストが保護対象の一つに掲げている歴史的建造物に、ストーンヘンジは入るのであるだろうか。19世紀半ばには、陸地測量局(Ordnance Survey)が、ストーンヘンジの詳細な測量と写真撮影を行っていたことや、19世紀末、考古学が学問として確立すると、重要な遺跡としての認識が高まったこと(Souden 24)、および創設者の一人で弁護士のロバート・ハンターがこの遺跡は国が責任を持って保護すべきであると訴えている点(Hunter 438)を考慮すると、ナショナル・トラストが関心を示していたことは確かであろう(四元 64)。

では、ストーンヘンジは、「公共の記憶」の媒体としてどこまで人々のなかに定着していたのだろうか。国民的アイデンティティを強めることのできるような建造物であったのだろうか。この点を考察するために、当時の『タイムズ』紙を調べてみよう(表1参照)。興味深いことに、1826年から70年までの45年間を見ても、ストーンヘンジという名前の入った記事は、わずかに2件である。しかも、それはイギリスとドイツのエッセンの王室関係者の訪問を、それぞれ短くあっさり過ぎるほどあっさりとして伝えているに過ぎない(1851年4

<表 1> 『タイムズ』紙におけるストーンヘンジ関連記事一覧

日付	記事のタイトル
1851年4月12日	Prince Albert at Stonehenge
1863年1月16日	Stonehenge and Salisbury
1871年9月14日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1871年9月21日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1872年8月17日	Vandalism at Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1872年8月20日	Vandalism at Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1872年8月24日	The Cursus at Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1874年8月21日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1874年8月22日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1876年8月19日	Stonehenge
1877年9月1日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1881年8月16日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1881年9月12日	The Restoration of Stonehenge
1881年9月18日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1881年9月20日	Stonehenge
1885年9月5日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1885年9月9日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1886年8月11日	Stonehenge
1886年8月17日	The Protection of Stonehenge
1886年8月19日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1886年8月23日	Stonehenge and Stratford-on-Avon
1889年9月18日	Vandalism at Stonehenge
1892年8月30日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1892年9月10日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1892年9月17日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1892年9月20日	Stonehenge and the Taulas of Minorca
1892年9月26日	Stonehenge: To the Editor of the <i>Times</i>
1899年8月22日	Stonehenge for Sale: To the Editor of the <i>Times</i>
1899年9月1日	The Future of Stonehenge

月12日、1863年1月16日)。しかし、70年以後の30年間を見てみると、27件に急増する。銅像の急増を見たのも、1870年ごろからであることを考えると、これは単なる偶然とは思えない(光永 82)。27件の記事の中で、'national monument'という言葉が出てくる回数は4回(1874年8月22日、1876年8月19日、1886年8月11日、1886年8月17日)、'national possession'が1回(1899年8月22日)、'national interest'が3回である(1886年8月23日、1886年8月19日に2回)。このことから70年代以後、ストーンヘンジはnational monumentであるとの認識が強くなったと言えよう。1882年には、後にナショナル・トラストのメンバーともなった国会議員のSir John Lubbockが草案した「古記念物保護法」(Ancient Monuments Act)が国会を通り、地主の土地私有権に配慮しつつも、地主が国の保護を求めたり、国に売却する権利を認めた(Chippindale 160; 四元 43)。当時、ストーンヘンジは第三代準男爵Sir Edmund Antrobusの私有地であったのだが、国が買い取るべきであるとの意見が、古物への造詣が深いサー・ジョン・ラボックによって提出されているのもこのような経緯があつてのことである(『タイムズ』、1886年8月19日)。1899年には、第四代のアントラバス準男爵がストーンヘンジの資産価値を疑い、ストーンヘンジを売りに出すのであるが



図版1 <ストーンヘンジの潜在的観光客がいかに多くの利益をもたらさうか>  
 (Chippindale 163)

(Chippindale 162), 放っておけば、このナショナル・モニュメントがアメリカ人に買われてしまうことを心配する声のあること (『タイムズ』, 1899年8月22日)<sup>19</sup>, ウィルトシャーの市議会で、国がストーンヘンジを購入すべきであると決議したことが伝えられている (『タイムズ』, 1899年9月1日)。アメリカ人の購入者の話は、後に第四代サー・アントラバスの未亡人によって冗談であったことが分かる (Chippindale 162)。当時の『パンチ』には、国が購入したときに、保護が完全になるどころか、いかに海辺ならぬ陸のリゾート地にストーンヘンジが変わるかということを描いた皮肉な、だが愉快的図版がある (図版1参照)。

『タイムズ』紙で、これほどストーンヘンジがクローズアップされたのも、国家的・国民的な遺跡が、時の侵食によって崩壊過程にあるからというよりも、むしろ心ない旅行者や遠足に来た者たちによってダメージを受け、国家的損失を招いているとの強い認識があるからである。70年代以降の記事の中では、礼儀を知らない旅行者への言及が目立つ。そのうちの一つをここで見てみるのも、当時の人々の集団的記憶、公共の記憶がどういうものであったかを知るのにいいだろう。

As a member of the Wilts Archaeological Society, I wish to draw the attention of all who value and appreciate Stonehenge from an anti-quarian point of view to the really serious depredations that are occurring there almost daily. I refer chiefly to the willful acts of the modern excursionists. I do not want to see the excursionist kept out altogether, but I want a certain protection put over Stonehenge that such acts as sliding down the face of one of the fallen stones, cutting initials in the turf inside the circle, scratching and chalking initials on the stones, picnicking inside the circle, throwing broken ... bottles about, with pieces of cucumber-rind now and then, and any other kind of litter, will be prevented. All of the above acts of desecration I witnessed one day last week. The place looked more like a pig-sty and

less cared for than I have ever seen it before. (『タイムズ』, 1889年9月18日)

このような悪さをするのは、階級的には、中産階級 (tourists from all parts of England) のみならず、地元の下層の者たち (rustics) も含めてのことであったようだ (『タイムズ』, 1885年9月5日)<sup>20</sup>。またチップペンデルによると、ストーンヘンジは、19世紀を通じて、日曜学校や休日の遠足の格好の地であり、フェアも途絶えることなく続いており、マチネが開かれることもあったという (Chippindale 153)。19世紀末には、夏至のときの太陽が昇ってくるのを見物するのがはやりで、この主要な年中行事に天気がよければ、2,000~3,000人のお行儀がいいとは言えない見物客が繰り出してきたという (Chippindale 156)<sup>21</sup>。

以上、見てきたように、ストーンヘンジは、ネイションという「記憶の共同体」にとって、ナショナルな遺産として、「公共の記憶」としてふさわしいものであることがわかった<sup>22</sup>。イギリスという国がアイデンティティを強化するのに、一役買うことができる建造物、人々の中にイギリスのイメージとして定着させ記憶させるのにふさわしい建造物、それがストーンヘンジなのである<sup>23</sup>。

このようなナショナルな遺跡で、テスは官憲の手にわが身をゆだねることになるのである。テスを捕まえる警察の者が出てくる場面は注目に値する。東の水平線から太陽が昇りつつあるとき、その太陽の中から現れでもしたかのように警察が現れる。

At the same time something seemed to move on the verge of the dip eastward—a mere dot. It was the head of a man approaching them [Tess and Angel] from the hollow beyond the Sun-stone. . . . The figure came straight towards the circle of the pillars in which they were.

He heard something behind them, the brush of feet. Turning, he saw over the prostrate columns another figure; then before he was



aware, another was at hand on the right, under a trilithon, and another on the left. The dawn shone full on the front of the man westward, and Clare could discern from this that he was tall, and walked as if trained. They all closed in with evident purpose. (370 ; 下線は筆者)

ストーンヘンジは、当時ケルトのドルイド僧の太陽神を祭る神殿であったと考えられていたのであるが、先ほど考察したように、イギリスのナショナル・アイデンティティを強化するにふさわしい「公共の記憶」の場であった。また、この場所に登場した警察官は、犯罪を裁く法律という集合的記憶を体現しているわけであり、その法律がまさにネイションを支えているものでもあるから、概念的にネイションと一体のものである。ネイションと一体化して考えることのできる警官と遺跡という二つの要素は、またイメージ的にも、石柱の陰から突如として湧いて出てきた複数の警官という構図の中にしっかりと捉えられている。警官がストーンヘンジの申し子という印象を与えるからである。さらには、太陽とストーンヘンジとは、太陽石（ヒールストーン）を通じて一体化しているので、太陽はネイションの象徴ともなる。よって、その太陽から生まれ出てきたかのような警官が東から徐々に近づいてくる描写と、その太陽の光を浴びて西から近づいてくる警官とは、ネイションという一点でつながった自然な描写となる。すると、テスは、ナショナルなアイデンティティを支える場の一つであるストーンヘンジで、「日の沈むことのない大英帝国」の象徴とも言うべき太陽に見守られて、国家権力によって逮捕されるという解釈が成立し、最後の監獄の処刑の場面でテスの処刑を知らせる黒旗が掲げられるのは、ストーンヘンジが陽画であるとするれば、陰画として捉えることが可能となる。

ただ、このようにナショナルな「記憶の共同体」の一部としてストーンヘンジを解釈し、テスを国の法律によって厳正に処罰されたものとみなす、いわば当たり前の解釈に対して、何か釈然としないものを感じてしまうのはなぜだろうか。その理由は、一つには、テスはストーンヘンジをあまりよく知らなかったせいもあって、当時の中流階級、近隣の人々とは違い、それをナショナル・

モニュメントとしては認識していないということだ。ということは、テスはストーンヘンジをナショナルな「公共の記憶」として持っている人々の輪の中には入っていないということであるから、当然、ネイションを自己のアイデンティティの基盤とすることはできないということになる。よって、テスはネイションの法によって裁かれたのだというような月並みな言い方には、不満が残るのだ。

もう一つの理由としては、太陽が昇る場面があまりにも荘厳な美しさを感じさせて、法を執行するいかめしい社会とは調和しないということが言える。まずはその場面を見てみよう。

The band of silver paleness along the east horizon made even the distant parts of the Great Plain appear dark and near; and the whole enormous landscape bore the impress of reserve, taciturnity, and hesitation which is usual just before day. The eastward pillars and their architraves stood up blackly against the light, and the great flameshaped Sun-stone beyond them; and the Stone of Sacrifice midway. (370 ; 下線は筆者)

All waited in the growing light, their faces and hands as if they were silvered, the remainder of their figures dark, the stones glistening green-gray, the Plain still a mass of shade. Soon the light was strong, and a ray shone upon her unconscious form, peering under her eyelids and waking her. (370 ; 下線は筆者)

この日の出の場面では、まだ暗と明が同居していて中間の銀色も見える世界が現出するのであるが、『帰郷』のエグドン・ヒースの冒頭の場面を思い起こさせ、ハーディが好きな時間帯の風景のようである<sup>24</sup>。この荘厳な静謐を秘めた美しい描写は、社会の法の裁きというイメージとは合わないのではなからうか。作品全体からみて、テスに罪はほとんどないという印象が強いところで、その

ネイションが裁くという行為の不当性が感じられるにも関わらず、ネイション＝太陽は、美しく描かれすぎていると感じてしまうのだ。では、この太陽をどのように受け取るべきなのか。この荘厳な美しさを読者は、一度前に見たことがあるはずだ。それは、テスが、臨終の時が迫りつつある自分の赤ん坊に、自身で洗礼を施す場面だ。あの場面の崇高さ、あのとときのテスの大きさに匹敵するのだ。太陽は、むしろテスそのものの姿ではないかとさえ思えてくるのだ。このような印象から、ナショナルな「公共の記憶」としてのストーンヘンジという捉え方をして、テスが裁きを受けたと取る見方は、真実の半分しか伝えていないのではないかと思われるのだ。

ここで、比較の上からもハーディよりも少し前の画家たちが、ストーンヘンジをどう描いたのかを見てゆこう。一つは、ハーディが大変な影響を受けたターナーの線彫画である<sup>25</sup>。オリジナルは水彩画であった。「ストーンヘンジ、ウィルトシャー」(1829年) (線彫画) {From *Picturesque Views in England and Wales from Drawings by J.M.W. Turner 1832-8*} では、太陽と巨石との生き生きとした関係が、太陽を背景にして、トリリソンの輪郭を浮かび上がらせることによりドラマタイズされており、不気味な稲光を受けて、前景では羊飼いが死に、彼の羊の群れはばらばらになっている (図版2参照)。これは明らかに、『テス』の厳粛な夜明けの太陽の場面とは違う意味を持っているであろう。ラスキンは、この絵を、復讐と応報(天罰)のドルイド的な象徴とみる。稲光はゴルゴンの光であり、天罰・審判・裁き・正義の雲が上にかかっている (*The Expressive Eye* 220)。もっとも羊飼いに何の天罰が下ったのかは、よく分からない。もう一枚の何やら不吉な絵は、コンスタブルの手になる水彩画である。「ストーンヘンジ」(1836年、水彩)と題されたこの水彩は、1936年のロイヤル・アカデミー展に出品したものである (図版3参照)。コンスタブルが1820年、一度だけストーンヘンジを訪問した際のスケッチがもとになっている。虹は、伝統的には、旧約聖書における神と人との契約の際に現れたことを受けて、希望・再生・復活のしるしであるが、この水彩では、二重の虹は希望の象徴であると同時に移ろいやすい自然の姿を暗示している。カタログにつけられたコンスタブルの銘記には、「ストーンヘンジという神秘的な記念碑は、遠い、不



図版2 ターナー作「ストーンヘンジ、ウィルトシャー」(1829年、線彫画)  
(Chippindale 106)



図版3 コンスタブル作「ストーンヘンジ」(1836年、水彩)  
(Chippindale 51)

毛の、果てしもない荒野に立ち、過去の時代の出来事にも現在の実用にも関わりなく、あなた方を、歴史の記述の彼方、まったく未知の時代の暗闇へ導いてくれる」と書いてある（ウォーカー 154）。これは虹を希望だけの意味に取ることを不可能にしている。虹のはかなさが、契約のはかなさを示唆しかねないのでなかろうか。さらに、ここに描かれた空は、美術に現れた最も不吉な空の一つとあってよいが、この空を満たす、大異変の知らせのごとき雲は、虹の希望のメッセージをさらに弱めてしまう（ウォーカー 154）。添景として現れている左下の野うさぎは、巨石の永遠性と対比されるつかの間の自然の姿を表すのだろうか。ツーリストらしき人物はコンスタブル夫妻だろうか。女性は1828年になくなった妻のマリア・ビクネルかもしれない。これら二枚の絵は、どちらも不吉な雰囲気を発散しているという点で、ケルト的な、懲罰的な意味で立ち現れてくるストーンヘンジとやってよいのであろう。『テス』において太陽が昇ってくる際の静謐の支配する厳粛な美の場面とは正反対の、心を不安定にさせる雰囲気を発散しているというよいだろう。

先ほど、テスがナショナルな意味のストーンヘンジによって裁きを受けたというのは、真実の半分しか伝えていないのではないかと言っておいた。では残りの半分の真実は何かと言えば、それは、テスの個人としてのアイデンティティの強烈さからくる。アレックを殺害して、彼の情婦としてのアイデンティティを葬り去り、情婦としての記憶の場である青鷺荘を後にしたテスにとって、このストーンヘンジの時点で唯一のアイデンティティとして残っているのは、異教的な女、キリスト教徒、マールロット村の娘、英国というネーションの一員、そのどれでもなく、ただエンジェルの妻としての立場だけである。テスがエンジェルに、妹のライザ・ルーと結婚してくれと頼むのも、この観点から理解できる。テスは、妹とエンジェルの結婚によってできる家族を、家系が連続する記憶の場としてというよりも（家系にはいい加減うんざりしているであろう）、自分とエンジェルの個人的な愛情関係の持続する場として捉え、そこに自己のアイデンティティを見出しているのだ。そこを、自分の記憶が保持される場として捉えている。だからこそテスは、ライザ・ルーは自分のいいところだけからできていると言ったのである。要するに、テスはエンジェルとの愛情または

愛情の記憶を自分の唯一のアイデンティティとしたのである。死にかかっている子供にソローと自ら洗礼を施したときの崇高な姿が、テスのソローに対する愛情の証明でもあったように、太陽が美しく荘厳されて昇ってくるのも、テスとエンジェルの愛情の記憶をやさしく讃えたいという作者ハーディの思いの表れではなかろうか。そしてストーンヘンジは、これまで二人の記憶が刻まれたことはなく、この逃避行で立ち寄って一晩過ごしたことによって初めて記憶が刻まれたわけであるが、テスはこの世を去ってしまうわけであるから、今後はエンジェルとライザ・ルーによって思い出されるべき記憶の場となるのである。

#### 4

#### テスと個人の記憶／日付

テスが何らかの公共の記憶、集団の記憶ではなく、個人の記憶を重視して生きていることは、次の引用からも分かる。これは自分の子供のソローの死を見取った後、しばらく経ってからのことで、まだトールボセイズ農場へ行く前のことである。つまり未婚の母というアイデンティティを失った後のことである。

She philosophically noted **dates** as they came past in the revolution of the year; the disastrous night of her undoing at Trantridge with its dark background of The Chase; also the **dates** of the baby's birth and death; also her own **birthday**; and every other day individualized by incidents in which she had taken some share. She suddenly thought . . . that there was yet another **date**, of greater importance to her than those; that of her own death, when all these charms [her physical charms] would have disappeared; a **day** which lay sly and unseen among all the other days of the year, giving no sign or sound when she annually passed over it; but not the less surely there. . . . Of that **day**, doomed to be her terminus in time through all the ages, she did not know the place in month, week, season, or year. (112; 下線・太字は筆者)

ここにはテスの日付に対するこだわりが見て取れるが、そのすべてが、テス個人に起こった出来事の日付、テスの個人的経験に関わるものであることがひとときわ目を引く。チェイスという名の森における不幸な経験、子供の誕生と死、自分の誕生日、自分の死亡日、ここからは実存的な人生の鼓動が伝わってくる。一人の人間のいくつかの通過儀礼をとおした成長と変化が示唆されている。個人の記憶に残る日付である点では（死亡日は別）、日記に記入するにふさわしい内容をテスが念頭においていることがわかる。ここには、村落共同体を「記憶の共同体」とするならばあるはずの、祭り等の年中行事への言及が全くない。小説の冒頭ではマーロット村のクラブ・ウォーキングでテスがダンスをする場面が描かれてはいなかったであろうか。読者は、テスにとって村は同一化の対象ではなかったことを知るのである。一部の知識人・文化人グループからなる神話の知識を共有した「記憶の共同体」が押しつける、異教の女神が入ってくる余地もない。キリスト教徒という「記憶の共同体」が押しつけてくる聖人の記念日もない。歴史教科書が押しつける、フランス革命記念日や女王即位50周年記念祭といった、ネイションのような大きな集団のアイデンティティを自己アイデンティティとする立場もここには見られない。ここにあるのは、一種の公共の記憶の否定であり、文字テキストとして主に現れる歴史とは違い、テスの頭の中になし記憶として残らない個人的な記憶である。それは、せいぜいオーラルな形で、ごく身近な者だけに語られる程度の内容である。ここからは、寄り添なきテスの悲痛な声なき声が聞こえてくる。田舎のちょっとした教育しか受けていない女性が一生懸命、哲学的に（philosophically）考えた思索の跡が見られる<sup>26</sup>。

## 結 語

テスが直面していたのは、農業労働者の移動の時代、人間関係が希薄になる時代、進歩しつつある科学技術が社会に大きな変化を引き起こしている時代であった。そのような中、農村共同体はだんだんと崩壊しつつあった。歴史学者のピエール・ノラは言っている。「19世紀の末、とくに農村社会の崩壊などで伝統的なバランスが決定的に揺らぎ始めたとき、記憶は、ベルク

ソンによって哲学的考察の中心におかれ、フロイトによって精神的自我の中心におかれ、またプルーストによって自伝的文学の中心に置かれたのである。農村社会という、大地により体現される、記憶のイメージそのものだったものが侵されたということと、個々人のアイデンティティの中心に記憶が位置するようになったということ」（『思想』26）とはコインの表と裏のようなものである。「原光景と、よく知られた小さなマドレーヌ菓子という、きわめて私的であるがまた普遍的であるふたつの記憶の場は、フロイトとプルーストの二人からの賜物である。歴史的なものから心理学的なものへ、社会的なものから個人的なものへ、伝達可能なものから主観的なものへ、反復から想起へ、というこの記憶の移行は決定的な転換なのである。この移行によって、記憶の新たなあり方がはじまり、記憶はこれ以後、私的なものとなるのである」（『思想』26）。集団の記憶から個人の記憶への移行。これこそ、テスのアイデンティティの変化に伴って変化した、テスの記憶のあり方そのものではなかったか。マーロット村という村落共同体の娘から、土地に深い根を下ろさない季節農業労働者にまで身を落とすが、その間も集団の記憶を求めて、ダーバーヴィル家の家系を再活性化しようとするものの、偽ダーバーヴィルに裏切られ、最後のストーンヘンジの場面に至る。ノラは、価値を保存し伝達することを保障する、記憶と一体化した共同体であった教会、学校、家族、国家などが終焉を迎えたと言っているが（『思想』16）、その影響をテスも受けているのである。しかし、テスの場合には、他人には伝達することが難しいエンジェルとの愛情関係だけは、その主観的・心理的な関係だけは残ったのであり、それを自己の力として、自己のアイデンティティとして、個の力強さをみせたのである。テスが「記憶の共同体」を次々と失っていき、最終的にネイションの裁きの力を象徴するストーンヘンジと太陽とが、彼女を抹殺して記憶を消してしまう一方で、太陽に照らされたストーンヘンジの荘厳な美しさは、個の力強さをみせたテスの純粋さに対する、ハーディの鎮魂のイメージを提供してもいるのである。『テス』は、場所の感覚を失い、集団のアイデンティティを失ってしまった、近代的な女性の、個の力の美しさを讃えた悲劇と言っているといえるのである。

<sup>1</sup> 本論文作成にあたっては、向井秀忠教授（松山大学）が、2004年10月に開催された日本ハーディ協会全国大会（於西南学院大学）で行った研究発表「ヒロインはストーンヘンジを目指す」におけるフランシス・バーニーとハーディの比較考察に、啓発を受けたことを述べておきたい。氏からは、その後、印刷前の原稿のコピーを見せて頂いた。また、同僚の江崎義彦教授からは、ストーンヘンジがロマン派のワーズワースの『序曲』や、ブレイクの詩の中にも出てくることを教えて頂いたが、本稿には間に合わなかったため、今後の課題としたい。両先生にはここに深謝したい。

<sup>2</sup> 農場労働者の移動については、"The Dorsetshire Labourer"を参照。また、スネルはハーディのリアリズムに疑義をさしはさみ、ハーディが自他ともに認めるような、当時の農村を忠実に描いた作家かどうかは疑わしいと言う。例えば、テスがフリントコムアッシュ農場でカブ取りをしている場面は、『テス』の時代設定の80年代にすでに男女分業が農村労働者の間にも浸透していたことを考えるとありえないことだと、スネルは言う。また、一年ごとの'hiring fair'はもうこの頃には少なくなっていて、ほとんどが日雇いであったこともハーディは無視していると言う。さらには、農場労働者をステレオタイプな「田舎者」(Hodge)、つまり滑稽な動物として描くところからハーディは抜け出していないので、聞き取り調査からは浮かびあがってくる労働者の本当の苦しみや声の音が小説からは伝わってこないとも言う。このようにハーディがリアリズムに徹し切れていない理由として、スネルがあげているのは、スノビズムである。高名な作家としてロンドンの上層中産階級の仲間入りを果たしたハーディは、農村社会の現実をそのまま描くことによって、貧しい親戚が田舎にいるのではと回りにさとられるのを極度に恐れていたのではないかというのである。それよりはスコット等の文学者のこれまでのコンヴェンションに従って、コミカルな田舎者として描いた方が無難であるとの判断が働いたのだろうという。ハーディの農村リアリズムの限界を指摘したスネルの論文は、注目すべき社会経済史の論文と言ってよい。K.D.M.Snellの第8章：Thomas Hardy, rural Dorset, and the family 374-410ページを参照のこと。

<sup>3</sup> 記憶のさまざまな捉え方としては、Klein論文が見事に近年の研究成果を要約している必読論文である。また、記憶についての通時的な概観については、Le Gof, 51-99ページを参照。

<sup>4</sup> 家系を研究した批評書としては、GilmartinとO'Tooleを参照。

<sup>5</sup> Cross-in-Handの不吉な伝説も口承によって伝えられていた。

<sup>6</sup> 文化遺産と記憶の関係を論じたものとしては、小川伸彦他著『文化遺産の社会学——ルーヴル美術館から原爆ドームまで』が大変充実している。

<sup>7</sup> 18世紀のドルイド・マニアおよび、ステュークリーが文書よりもフィールドワークを重視したことについては、チッペンデイルの第四章を、またドルイドについて残されている記述（タキトウス、シーザー、プリニウス）については、同著者の第五章を参

照のこと。イニゴー・ジョーンズ以前の考えをまとめたものとしては、Fergussonの206ページを参照のこと。彼は、ローマ時代とサクソン時代の間のアーサー王時代のブリトン人（ケルト人）のものではないかと推測している（211）。同様な考え方であるが、ドルイド僧たちは、ローマ人の攻撃を受けアイルランドに逃れた後、彼らが去ったのを見て帰還し、ソールズベリー平原にストーンヘンジの巨石群を建てたのだと、John Kenrickは言う。また、起源と目的についての諸説を簡潔にまとめたものとしては、Earl of Carnarvonの小論がある。

<sup>8</sup> 考古学の簡単な歴史については、ロザリンド・ウィリアムズの61-68ページを参照。

<sup>9</sup> ハーディは、『タイムズ』紙に"Maumbury Ring"という記事を投稿しており、その中で、発掘の様子、古代ローマ人が旧・新石器時代の土塁を再利用したこと、17世紀の内戦以後のエピソードなどを語っている。特に18世紀初め、19歳で夫毒殺の嫌疑をかけられ処刑された無実と思しきMrs. Thomas Channingの話は興味深い。また、ハーディは、"A Tryst at an Ancient Earthwork"という短編で、カスターブリッジ近郊の、Maiden Castleという先史時代の砦の違法な発掘をする好古家を扱っている。

<sup>10</sup> バークは、「記憶の共同体」(memory communities)という言葉で、スタンリー・フィッシュの「解釈共同体」から取っている(56)。

<sup>11</sup> 第八章の『テス』を論じたところを参照。

<sup>12</sup> Introductionおよび第7章のハーディを論じた箇所を参照。

<sup>13</sup> Bullen, *The Expressive Eye*, 209-222を参照。*The Sun is God*, の第7章, "The Gods in Wessex Exile: Thomas Hardy and Mythology" 181-98ページを参照。

<sup>14</sup> 言うまでもないが、「記憶の共同体」は、ここでは「解釈共同体」としても機能している。ある記憶を共有した集団が、あるものに対してときに類似の観点を取り、類似の解釈を提示する傾向があるということは常識の範囲内のことと言ってよい。

<sup>15</sup> 付言しておくが、第一節で見たように、当時の人々は、この建造物をドルイドの寺院として考えていた。ギリシア・ローマの神々ではないが、異教の太陽神崇拝であるという点では同じであるから、プリンは言っていることがあてはまる。しかも、カエサル『ガリア戦記』によれば、ドルイドは生贄を捧げる習慣があり、それは人間の血が流されたときに人間の血を流すことによって神々をなだめるためであり、神々は犯罪者の生贄を好むということなので(Chippindale 83)、テスはアレックという人間の血を流した犯罪者として生贄の祭壇に捧げられることになるのだ。このカエサルのドルイドに関する知識を共有した人々が、当時どれほどいたのかは分からないが、ドルイドの寺院であるということは、大衆向けの便利な事典の役割を果たしていた『ベニーマガジン』の記述からも分かるように、ある程度の人たちが共有していた知識ではなかったろうか。するとそのような人たち、すなわちそのような知識を共有していた「記憶の共同体」は、テスを異教徒ケルト人と重ね合わせ、彼女はドルイド僧によって生贄にされたのだという象徴的解釈をしたのではなかろうか。

<sup>16</sup> 18世紀に、対仏戦争を通して、イギリス国民がいかに形成されていったかについては、

リンダ・コリーを参照のこと。

<sup>17</sup> ネイションという概念は、共通の言語、民族、領土、歴史、文化という客観的基準も、本人の帰属意識という主観的基準のどちらをもすり抜けてしまう複雑なものであるから、定義することが難しいとホブズボームは強調する。Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780* のイントロダクションを参照。

<sup>18</sup> ナショナル・トラストの先駆的な運動として、湖水地方の自然保護を訴えたワーズワースは、『湖水案内』のなかで、湖水地方は「一種の国民的財産」であると言っている。ペイト、84-85 ページ参照。また、ナショナル・トラストが育てようとしているのは、本当の愛国心であって、当時、よく見られたショーヴィニズム（盲目的愛国心、国粹主義）ではないと言う（四元 58）。イギリスのナショナル・アイデンティティを強化するものがナショナル・トラストであるのに対し、フランスでそれに相当するものの一つが「ツール・ド・フランス」である。この観点から見て、ジョルジュ・ヴィガレロが、「ツール・ド・フランス」はフランスの領土をなぞるようにコースが設定されているとの論を展開しているのは大変興味深い。ノラ第三巻所収、345-388 ページ。

<sup>19</sup> ハーディは、『デイリー・クロニクル』に載った 1899 年のストーンヘンジに関するインタビュー記事の中で、ラボックと同じ意見を述べている。ストーンヘンジは、国の財産だから国が買うべきであり(Orel 197)、アメリカ人が買って移動させても、場所から来る連想が失われてしまうからストーンヘンジを再現することはできないし、ソールズベリー平原はストーンヘンジが与えてくれる豊かな連想を失って場所の魅力がゼロになると言う(Orel 198)。

<sup>20</sup> ハーディ自身はこのような昼間のピクニック風景のストーンヘンジが嫌いであったようで、"In the brilliant noonday sunlight, in which most visitors repair thither, and surrounded by bicycles and sandwich papers, the scene is not to my mind attractive, but garish and depressing"(Orel 200)とインタヴューの中で述べている。後で見るが、『テス』のストーンヘンジにおける早朝の日の出の風景の方がよほど好きであったろう。

<sup>21</sup> 上流の訪問客としては、もちろん王室関係者がいる。また、アメリカ人観光客にも人気のスポットであったようで、エマソンはカーライルと一緒に訪問している(Chppindale 152)。

<sup>22</sup> ストーンヘンジが、この時期のナショナル・アイデンティティを強化する、「公共の記憶」となりうるかどうかを、『タイムズ』紙を使って探った筆者が依拠した考え方は、ベネディクト・アンダーソンのいう、「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体」(24) であり、「日々顔を付き合わせる原初的な村落より大きいすべての共同体は、(中略) 想像されたものである」(25) ということ、その統合的なイメージを強化するのが、出版・印刷等のコミュニケーション・メディアであるという考え方である(アンダーソン 1～3 章)。この考え方によれば新聞が国民を水平に結びつけるメディアとして当時有力なものであったことは明らかである。

<sup>23</sup> しかし、このことは何の問題もなく、ストーンヘンジがナショナル・モニュメントとして受け入れられていたことを意味すると取ってよいのだろうか。というのは、この建造物はケルト民族のドルイド僧の寺院であると一般に信じられていたのではなかったか。当時、植民地アイルランドの自治問題を抱えて、このケルト・モニュメントはなんらの問題を生じなかったのであろうか。このケルト人またはケルト表象が、イギリス人の中で占める微妙な位置については、ナショナル・トラストの研究(水野)やギルマーティンの論考のイントロダクションが大変参考になる。

<sup>24</sup> 実際、ハーディ自身が言っているのだが、ストーンヘンジは平原という開けたところにあるため、建造物が小さく見えてしまい、昼間は印象が薄くなってしまふ。昼間のピクニック客やサイクリング客がいるときは興ざめと言っている。一番すばらしいのは、嵐になりそうな天気のとときや、夕方の暗くなってから。重苦しい雲が垂れ込めて、大空が石柱にとって自然の屋根となり、石の表面に色がついているように見えるときだとのこと(Orel 200)。

<sup>25</sup> ハーディがターナーに引かれたのは、1887 年のイタリア旅行(ジェノヴァ、ミラノ、フィレンツェ、ローマ、ヴェニス)で、特に、ベニスの光に魅せられたことが大きなきっかけともなり、1886 年から 89 年にかけてのロイヤル・アカデミー等におけるターナー展によって、関心が深まっていったようである(Bullen, *The Expressive Eye* 191-95)。

<sup>26</sup> 日付の問題を歴史記述の問題として捉えた論としては、富山 217-220 ページを参照。

## 参 考 文 献

- Anderson, Carol, et all. *A Teacher's Handbook to Stonehenge*. London: English Heritage, 1996.
- Atkinson, R.J.C. *Stonehenge and Neighbouring Monuments*. London: English Heritage, 1987.
- Bonica, Charlotte. "Nature and Paganism in Hardy's *Tess of the D'Urbervilles*." *ELH*: 49 (1982): 849-862.
- Bullen, J.B. *The Expressive Eye: Fiction and Perception in the Work of Thomas Hardy*. Oxford: Clarendon Press, 1986.
- , ed. *The Sun Is God: Painting, Literature and Mythology in the Nineteenth Century*. Oxford: Clarendon Press, 1989.
- . "The God in Wessex Exile: Thomas Hardy and Mythology." Bullen, *The Sun is God* 181-198.
- Burke, Peter ed. *Varieties of Cultural History*. Ithaca: Cornell UP, 1997.
- Carnavon, Earl of. "A Vigil in Stonehenge." *The National Review*. 5 (1885): 540-46.

- Chippindale, Christopher. *Stonehenge Complete*. Ithaca: Cornell UP, 1983.
- Fergusson, James. "Stonehenge." *The Quarterly Review*. 108 (1860): 200-25.
- Flint, Kate. *The Victorians and the Visual Imagination*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Freud, Sigmund. *Civilization and Its Discontents*. *The Freud Reader*. Ed. Peter Gay. New York: Norton, 1995. 722-772.
- Gage, John. "J.M.W. Turner and Solar Myth." Bullen, *The Sun is God* 39-48.
- Gilmartin, Sophie. *Ancestry and Narrative in Nineteenth-Century British Literature: Blood Relations from Edgeworth to Hardy*. Cambridge: Cambridge UP., 1998.
- Gose Jr., Elliot B. "Psychic Evolution: Darwinism and Initiation in *Tess of the d'Urbervilles*." *Critical Essays on Thomas Hardy: The Novels*. Ed. Dale Kramer. Boston: G.K.Hall, 1990. 219-228.
- Hardy, Thomas. *Life's Little Ironies and A Changed Man*. London: Macmillan, 1977.
- . "The Dorsetshire Labourer." Orel, 168-191.
- . "Maumbury Ring." Orel, 225-232.
- . "Shall Stonehenge Go?" Orel, 196-201.
- . "Some Romano-British Relics Found at Max Gate, Dorchester." Orel, 191-5.
- . *Tess of the D'Urbervilles*. London: Macmillan, 1974.
- . "A Tryst at an Ancient Earthwork" *Life's Little Ironies and A Changed Man*. 317-326.
- Hobsbawm, Eric and Terence Ranger ed. *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- . *Nations and Nationalism since 1780: Programme, Myth, Reality*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge UP., 1992. Canto ed.
- Hunter, Robert. "Inclosure of Stonehenge." *The Nineteenth Century and After*. 52 (1902): 430-38.
- Ingham, Patricia. *Authors in Context: Thomas Hardy*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- Johnson, Bruce. *True Correspondence: A Phenomenology of Thomas Hardy's Novels*. Tallahassee: UP of Florida, 1983.
- Kenrick, John. "Serpent Worship and the Age of Stonehenge." *The Prospective Review: A Quarterly Journal of Theology and Literature*. 7 (1851): 299-307.
- Klein, Kerwin Lee. "On the Emergence of *Memory* in Historical Discourse." *Representations* 69 (Winter 2000): 127-150.
- Le Goff, Jacques. *History and Memory*. Trans. Steven Rendall and Elizabeth Claman. New York: Columbia UP, 1992.
- Orel, Harold. *Hardy: Personal Writings*. London: Macmillan, 1967.

- O'Toole, Tess. *Genealogy and Fiction in Hardy: Family Lineage and Narrative Lines*. London: Macmillan, 1997.
- Souden, David. *Stonehenge Revealed*. New York: Facts on File, 1997.
- Snell, K.D.M. *Annals of the Labouring Poor: Social Change and Agrarian England 1660-1900*. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- "Stonehenge." *Penny Magazine* 22 Feb. 1834: 69-70.
- Vigar, Penelope. *The Novels of Thomas Hardy: Illusion and Reality*. London: Athlone Press, 1974.
- 安部安成・小関隆・見市雅俊他編 『コメモレイションの文化史——記憶のかたち』 (柏書房, 1999)
- アンダーソン ベネディクト著・白石さや／白石隆訳 『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』 (NTT 出版 1997)
- ヴィガレロ ジョルジュ著 「ツール・ド・フランス」, ノラ第三巻所収, 345-388 ページ
- ウィリアムズ ロザリンド著・市川泰男訳 『地下世界——イメージの変容・表象・寓意』 (平凡社 1992)
- ウォーカー ジョン著・安部信雄訳 『JOHN CONSTABLE』 (美術出版社 1979)
- 小川伸彦他著 『文化遺産の社会学——ルーヴル美術館から原爆ドームまで』 (新曜社, 2002)
- コリー リンダ著・川北稔監訳 『イギリス国民の誕生』 (名古屋大学出版会, 2000)
- 指昭博編 『「イギリス」であること——アイデンティティ探求の歴史——』 (刀水書房, 1999)
- ドゥムール ジャン=ポール著 「ラスコー」 ノラ第三巻所収, 263-304 ページ。
- 富山太佳夫著, 「歴史記述の前提としてのフィクション」, 『コメモレイションの文化史』所収, 207-224 ページ。
- 水野祥子著 「ナショナル・トラスト——景勝地保護と国民統合」, 『「イギリス」であること』所収, 186-206 ページ。
- ノラ ビエール編・谷川稔監訳 『記憶の場——フランス国民意識の文化=社会史』 (岩波書店 2003) 全3巻。
- ノラ ビエール著・谷川稔訳 「記憶と歴史のはざまに——記憶の場の研究に向けて——」 『思想』 2000年5月号 (岩波書店)
- ベイト ジョナサン著 『ロマン派のエコロジー』 (松柏社, 2000)
- 光永雅明著 「銅像の貧困——十九—二十世紀転換期ロンドンにおける偉人銅像の設立と受容」, 『コメモレイション』所収 81-118 ページ。
- 四元忠博著 『ナショナル・トラストの軌跡——1895~1945』 (緑風出版, 2003)